



## わたげ・ふあず 忘年会

いつもと違った雰囲気の中🎵で 2022年の労を

美味しい食事でねぎらいました!!



人生初!!の忘年会🎵を楽しみました♪

### 目次

- ・「T・D・S・N (Tanpopo Daily Support News) 64」 <2～4ページ>  
～選択してきたその先に～
- ・ものとりまくるちとらつく <5～6ページ>  
～たんぼぼの郷での実習を終えて～
- ・「お～い!ごと～く～ん!」 <7ページ>
- ・後援会のご案内・ボランティアの募集・編集後記(編集部) <8ページ>

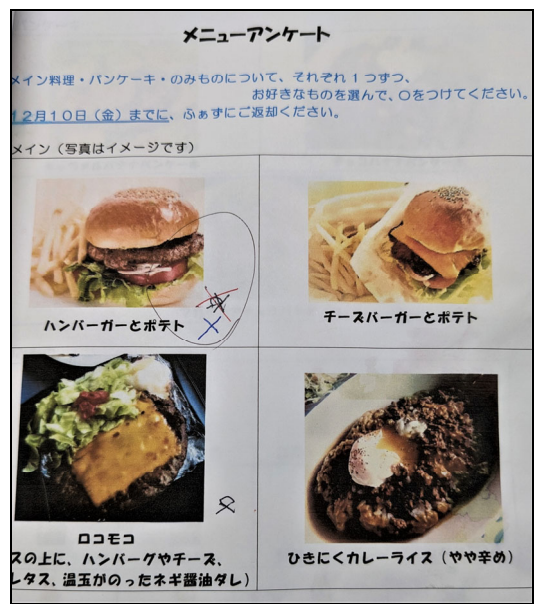
～選択してきたその先に～

こっとなあつぷ Vol. 127で、“自分で選ぶということ”について紹介をした利用者Hさんは、その後作業場面以外でも、日々の生活の中で様々な選択機会を経験してきました。今回はその中の一コマ、Hさんが「個別支援計画表」についての説明を受けて、“承諾するか”“承諾しないか”。その時の様子について、お話をさせて頂きたいと思います。

改めてHさんを紹介したいと思います。Hさんは、シンプルできっちりとしたものが好きです。とても真面目で、手先が器用です。趣味は旅行・ラジオ・テレビ・アクション映画鑑賞。お話好きです。Hさんなりの言葉巧みな表現で、積極的に挨拶や話をしてくれます。また、意思表示も他者へハッキリと伝えます。例えば、やりたい事に対しては「〇〇するよ！〇〇へ行きたいわ！〇〇食べたいわ！」等と。逆に出来ない、不快なことに対しては、様々な方法で「NO!!」と意思表示をします。口頭で「出来ねえ～」「〇〇抜きで」「〇〇なしよ」「〇〇×で」と表したりします。その他、破棄する、大声を出す、文字を指で擦り消す等と行動でも表したりします。文字や数字を読むことが出来ます。但し、文字や数字の書き表し方は、Hさん独特の字体です。例えば（添付写真①）ここでは、線で本人なりの数字を記載しています。また、（添付写真②）Hさんが自分で選んだものに〇をすることは出来ています。その他、Hさんが他者とコミュニケーションをとる時には、その相手と2人の環境が良いようです。それは何故か。Hさんがその相手に伝えたいことを、コミュニケーション手段を用いて練習をしていた時のことです。同室に通りすがりの他者が現れると、Hさんは「やあ！〇〇さんこんにちは！〇〇さんズームイン👉」と積極的に挨拶。その後、先程まで行っていた練習場面に戻るのですが、どこまで練習をしたかが分からなくなってしまうという経緯があったからです。



①

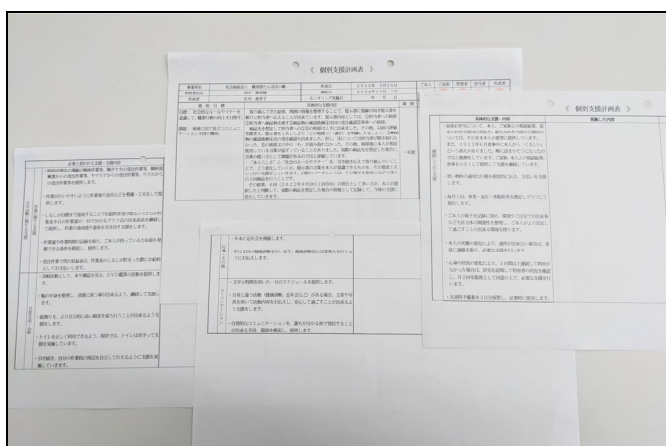


②

そのようなHさんの個別支援計画表は、Hさんの日々の行動評価を基に、ご家族、作成者を中心に支援者全体で、Hさんにとって必要な支援は何かと想像をし、Hさんの意思を汲みとれるよう努めながら作成をしてきました。その支援内容を、今までは作成者からご家族に説明をして、承諾を得てHさんへ1年間の支援を提供してきました。何故か。それは作成者が、Hさんに対して分かりやすく説明をする技量がなかったから。また長年、個別支援計画表を、作成者がご家族に説明をして、ご家族が承諾をするという流れに、どこか慣れてきてしまったからではないのかと思っています。まだまだ、利用者自身が“主語”となるような支援が行えていないのが事実です…。

では、今回、Hさんへの個別支援計画表を、どのように準備をしたのか、そしてHさん自身はどのように応えてくれたのかについてお話をしていきたいと思えます。

今までの個別支援計画表（添付写真③）に使用する言葉は、ご家族向けの“文章表現”です。今回は、Hさん自身が個別支援計画表を見て知り、理解をして、“承諾するか”“承諾しないか”を選択できるような“Hさんの個別支援計画表”（添付写真④）でなければなりません。“Hさんの個別支援計画表”を作るには、今までの“文章表現”を“解体と創造をする”ことが必要でした。それは「個別支援計画表」、その言葉自体から始まる作業でした。この作業のヒントとなったのが、Hさんの紹介にも載せました“Hさんが好きなこと苦手なこと、得意なこと不得意なこと”“Hさんの表現手段や方法”“Hさんが情報を得た時の反応”等、Hさんの一行動一行動の中からでした。



③



④

例えば、下記（③④の一部抜粋）のように従来の個別支援計画を“解体と創造”をしていきました。

ご家族向け 個別支援計画	Hさんの個別支援計画表
<p>“個別支援計画表”</p>	<p>“Hさん <sup>おこな</sup>ふあず <sup>おこな</sup>行いたいこと <sup>おこな</sup>行うこと”</p> <p>酒井 <sup>か</sup>書きました。</p>
<p>“自発的なコミュニケーションを、誰もが分かる形で発信することが出来る手段、環境を模索し、提供します。”</p>	<p>“Hさん <sup>はな</sup>話すこと <sup>か</sup>書くこと <sup>み</sup>見ること <sup>き</sup>聴く</p> <p>こと <sup>わ</sup>分からないこと <sup>し</sup>知る 酒井 <sup>も</sup>じ <sup>え</sup>文字・絵・</p> <p><sup>しゃしん</sup>写真・モノ <sup>つか</sup>使って <sup>てつだ</sup>お手伝いします。”</p>
<p>ご家族が内容を承諾した場合に、“押印とサイン”。</p>	<p>“○か×”で判断して貰えるように工夫。</p>

その他、Hさんが言葉だけではイメージしにくいものは、画像を用いました。

このように“Hさんの個別支援計画表”を準備して、面談当日を迎えました。面談時の説明方法として、面談を行う作成者が意識した点が一つ。Hさんの得意を想定した時に、受け取る情報手段は1つにすることでした。通常面談等の説明では、文章を提示した上で、口頭で説明をするという手段が多く取られます。その方法だと、Hさんにとっては、情報の受け方は2つになってしまいます。文章という視覚的情報、聴くという聴覚的情報の2つです。そうならないように作成者は、Hさんが一人で読めるような個別支援計画表の準備をしました。

相談室にて、Hさんと作成者2名が、“個別支援計画表”を机の上に置き対面して座りました。まず初めに、事前にお知らせしていた提示にて、この面談で行うこと、個別支援計画表は4枚あることを説明しました。Hさんが1ページ目を受け取ります。その瞬間!!Hさんは、紙面の写真画像に着目をして「△△だ!」と表出。作成者が意図していた文章上段から読むという視点から外れてしまいました。作成者は「△△です」と返答し、読んで欲しい文章を指で差して、Hさんが2ページ、3ページと読み進められるようにお手伝いをしました。以前あったような、どこまで読んだかが分からなくなってしまわない為です。



4ページ全てをHさんが読み終わりました。最後に、個別支援計画内容について、Hさんが“承諾するか”“承諾しないか”という意思表示を書類に貰う場面になりました。Hさんの第一声は「母さんきいてみよ!でも」という返答でした。そのHさんの応えは、いつも息子のことを大切に想う母さんが、息子の意思を汲みながら、個別支援計画表の承諾を、代わりに16年間行ってきた結果なのだろうと思いました。今回、“解体し創造”をしたHさんの個別支援計画表でしたが、そうすぐには“その長い年月”までを、解体することなど出来ないのかなあ”と…。

「母さんには酒井が聴いています」という旨をHさんへお伝えしました。すると、Hさんは「やるなら〇、〇書いてみよ」と言い、ボールペンで“〇”を書き入れました。面談を開始して10分58秒。初めて、Hさんが“自分の個別支援計画表”の説明を受けて、Hさん自身で決めた“時間”でした。



面談後、Hさんからは“このことを知れたかったんだよ、やっと知れたよ”という、何かスッキリしたかのような表情が伺えました。今回の個別支援計画表に、Hさん自身が“納得”されたのかも知れません。

今後の課題としては、Hさん自身が“新しい個別支援計画表の目標”を自分で立てていける。そうすることで、より“Hさん自身の生活が豊かになっていく”のではないのかと思っています。作成者としては、そのことを“どのように支援をしていけば良いのか”そのヒントは、必ずやHさんの“行動”から見てくるはずだと思っています。

文責：酒井真俊

このコーナーでは「横須賀たんぽぽの郷」最新ニュースをトピックスでお伝えしています。

～たんぽぽの郷での実習を終えて～

神奈川県立保健福祉大学3年  
宮城琴理

初めまして。神奈川県立保健福祉大学3年の宮城琴理と申します。私は、去年の夏にふあずとわたげで23日間の実習をさせて頂きました。今回は、私が実習を通して学んだことや感じたことを書かせて頂こうと思います。

## 1 利用者の方々との交流を通して

今回の実習では主にAさんの個別支援課題に取り組ませて頂きました。

私はAさんの個別支援課題として下駄箱掃除を設定し、Aさんが最終的に自立できるよう工夫しながら取り組みました。下駄箱掃除の方法が分からないAさんに対して、方法を伝えながら自力でできるように取り組むのは、正直とても大変でした。職員の方々にアドバイスをもらったこともありましたが、基本的には私1人で全てやらせて頂きました。私は、Aさんに分かりやすいような形で手順書を0から作成しました。初期のものと何度も改良を重ねた最終日のものを比べると、大幅に形が変わっていて自分でも成長したなと感じています。様々な工夫を行った結果、最終日に使用した手順書は、A利用者が最も理解しやすい形に近づけることが出来たと感じています。

## 2 支援とは

実習前と後では、私が思う「支援」の概念が全く変わりました。

これは、Aさんとの個別支援課題を進めていく中で多くのことを学ぶことが出来ました。個別支援課題を始めた当初は、私自身が理想とする形を実現する事に重きを置いてしまった結果、全面的にAさんに介入することになってしまいました。その様子を見ていた職員の方から、「全面的な介入はAさん自身の自立を妨げてしまう。」との指摘をもらったことで、支援は、私自身がやりたいことを誰かにやってもらうのではなく、利用者のやりたいことを手助けして、できるだけ本人の力で実行できるように支えるものであることを身をもって学ぶことが出来ました。



### 3 私が考えるソーシャルワーカーとは

クライアントは、それぞれ強みと弱みを持っていると思います。その上で、支援者は、クライアントの弱みを把握しつつ、本人の望みを叶えるために弱みに対して最小限の介入をするべきであると考えます。例えば、3日間行った施設で、箱を折る作業を行う予定のある利用者さん(Bさん)が、力を込めすぎてしまい箱が潰れてしまうことがありました。支援策として、Bさんに折る作業を任せない、という選択肢もありますが、そうするとBさんの手先が器用、という強みを活かしていません。そこで、力を込めすぎないように一定の場所で指が止まる補助具を使えば、Bさんの強みである器用さを活かしつつ、弱みの力を込めすぎてしまうという弱みを克服した状態で受注作業をこなすことができていました。

### 4 自分の課題

距離感の把握は自分にとってかなり難しかったです。利用者の方々との適切な距離感を私が把握することが出来ても、利用者の方々に理解してもらうことは難しいと感じました。支援者は普段から利用者と関わっているため近い距離で接することも可能ですが、そうすると利用者の方々が社会に出た時に、誰でも支援者との距離感で関わっても良いものだと誤解してしまいます。それが原因でトラブルになった例も過去にあるようで、職員の方々はそうならないよう一定の距離を守って接しているのが印象的でした。

しかし、利用者の方にその考えを100パーセント伝えるのは難しく、「腕を伸ばした距離を確保する」ということしか伝えることが出来ませんでした。本人は、悪意を持って距離を詰めてきている訳では無いため、ある程度の距離を置くべきだという理由を説明できないことにジレンマを感じることがありました。

### 5 感想

23日間と聞くと初めは正直長く感じていましたが、実際に始まるとあっという間に日々が過ぎていきました。職員の方はもちろん、利用者の方々とのコミュニケーションは、自分が今まで考えて来なかったようなことに気づくきっかけになりました。

またいつかボランティアとして訪問させて頂きたいなと思いました。ありがとうございました！



## 「お〜い、ごと〜くん！！」

「自由な意志は幻想!？」というタイトルを見て、何とは無しに最近視聴したNHKのテレビ番組の話である。自由な意志は、存在するのか、妄想なのか。ここで言う自由な意志とは、「何をしようか自分で考えて自覚的意識的に決断する」ということであつた。このことを、最新脳科学の知見で捉えようという内容であつた。

人生は、決断の連続で、どこへ行き、誰と会い、何をして、何を食べるのか等、様々である。もし、私たちに自由な意志が無いとすれば、私たちは決断をどう導き出しているのだろうかと思議になる。番組では、脳が勝手に意志が発生することを決めていて、そこには、自分の意志が関与する余地が無く、決断を促す意志は、脳の中で偶然生まれるものという捉え方ができるということであり、驚きである。脳科学では、40年ほど前に、決断のタイミングを導き出す実験を通して、多くのデータを集め、決断するときの平均的な脳の活動をグラフとして導き出している。それは、脳には、海の波のような、波のリズムがあつて、一定に見えるが、ある程度の「ゆらぎ」があるそうである。その脳のリズムのゆらぎ方で、意志が発生するタイミングが決まるという。寄せては返す波が偶然に高まった時に生まれるのが、私たちの意志だそうである。この高まりは、計器では計れるが、本人は特に何も感じていない。本人の意識とか自覚とかとは無関係に、神経活動が上がってきて、それが一定の大きさ、閾値（いきち）を超えるとそこで運動しようという意志が、半ば勝手にというか、自然に発生してしまつて、それに応じて運動が起きるといふ捉え方だそうである。また、別の実験は、ヘッドフォンの様な装置を頭に装着した被験者が、地面に引かれた赤い直線の上を真っ直ぐに歩くというものであつた。“前庭”という脳の平衡感覚を司る感覚器で、重力の方向をこれで捉えているそうであるが、そこに、被験者に気づかれない程度の微弱電力を流すと、真っ直ぐに歩けなくなってしまう。その背景は、真っ直ぐに歩くという意志に関わっているのは、“前頭前野”と呼ばれる部分の一部で、平衡感覚を調整する部分とは、異なつたところで情報の処理がなされており、そのため、被験者は真っ直ぐに歩こうという意志があるにも拘わらず、前庭の影響を受けて、逸れてしまうのだそうである。我々は、普段から自分が全て動きを決めていると思つているが、意志以外の部分が働いているということが、現象として分るということであつた。意志は、膨大な脳の活動の中では、実は、取るに足らない存在で、無意識の働きによって、簡単に覆されてしまうそうである。

また、人には、脳の中に、後付け再構成と呼ばれる、現象があるとのこと。選択を正当化し、脳が自分の解釈を書き換えてあたかも自分が選択したように思い込ませているというのである。つまり、人は自分の意志で決めたと思いたがる生き物で、自分の行動の理由を問われると後付けでも理由を考えてしまうそうである。本来は、選ぶ前に理由を考えているはずなのに、でも、実際には考えずに選んでいるらしい。どうして、理由の後付けが必要なのか。それは「自分という存在を得るため」といふことであつた。

浅学な私が、この番組を通して感じることは、人間はとにかく複雑で奥深いということである。自分の意志ですら、自分で決断しているのか心許ないようである。利用者への意思決定支援においても、人が人の意思決定を支援するということの、複雑さや難しさを感じている。「自分という存在を得るため」に、自分の意志で決めたといふ行為は必要という言葉を重ねて受け止め、今年も研鑽を重ねたいと思つています。

施設長 後藤博行

## たんぽぽの郷後援会のご案内

たんぽぽの郷後援会は、横須賀・三浦地区に在住の「自閉症」という障害を伴った人たちが、地域の一員として自分らしく生活していくために、必要な支援に取り組んでいる【社会福祉法人横須賀たんぽぽの郷】の活動を支援する事を目的に組織されました。

▼ 年会費	個人会員	1口	3,000円
	団体会員	1口	10,000円

たんぽぽの郷後援会にご理解、ご協力くださる方は、下記の郵便為替口座をご利用ください。

郵便為替口座番号 00240-9-17474  
郵便為替口座加入者名 たんぽぽの郷後援会



### ボランティアさん 募集中

わたげ・ふあず・こっとなはうすで、自閉症を伴う方々と一緒に何か活動してみませんか？

作業の検品、余暇活動の支援、清掃等お手伝いをしていただけの方がいましたら、ご連絡ください！！

〈連絡先〉

わたげ 電話:046-844-0038 (担当:ひがしかわ)

E-mail: aaq40690@hkg.odn.ne.jp

ふあず 電話:046-854-5004 (担当:さかい)

E-mail: faz2022@themis.ocn.ne.jp

こっとなはうす 電話:046-852-8355 (担当:すずい)

E-mail: tanpoponosato-ch-rg250e@jcom.home.ne.jp



### 編集後記

昨年の暮れ、昆虫を中心に生き物好きな息子と、横浜市街の川沿いへ行き散策をした。この時期、倒木の下や土を掘らない限り、色々な生き物と出くわすことはないのだろうか、地表に顔を出しているのは、ナミテントウとナナホシテントウであった。歩き進むその先を、真剣な眼差しで見つめる息子が、枯れ草に同化し動かなくなったハラビロカマキリを見付けた。その状態から推測をして12月上旬頃まで生きていたのかも知れないと、2人で仮説を立てる。季節外れの虫網と虫籠を持つ僕らに、地元の方と思われる男性が自転車で駆け寄る。男性は小さな声で「ほら、カワセミが2匹(羽)」と微笑みながら川を指差す。その先には、煌びやかな“青色”の背をしたカワセミが1匹(羽)枝にとまっていた、もう1匹(羽)は、冬の陽射しを受けながら“青色”を輝かせ羽ばたいた。初めて見る“青色”を僕は目で追いかける。視界から、それらの“青色”がなくなったところで、優しく微笑む男性に僕は感謝の言葉を伝えた。

息子の本格的な昆虫探しが始まったのは、昨年の夏。その始まったばかりの世界に寄り添うと、夏から秋、秋から冬、自然の中で暮らす生き物の多様な生き方を少しずつ知る事が出来始めた。そして、その事に気が付くと、日常の中から今まで聴こえていなかった音色が聴こえ、今まで観えていなかった形や色、動きが観え始めるようになってきた。

今年も一年、自然の中で暮らす一員として、日々の変化を実感しながら新たな世界に出会えればと思う。

編集部：酒井

編集 社会福祉法人 横須賀たんぽぽの郷 〒239-0824 横須賀市西浦賀3-13-21

TEL:046-844-0038/FAX:046-844-0036 E-mail: aaq40690@hkg.odn.ne.jp